

1923年 (大正12年) [19歳] 旧制水戸高等学校 1年生

「辰雄日誌 1923」No. 2 (3)

—— 1923年6月1～31日 ——

小池辰雄

○1923年6月1日 (金)

曇。The first day of Summer. 春は去った、夏は来た。人々よ、汝らの日常の生活は、幸福なるが如し、愉快なるが如し、得意然たるが如し、強きが如し、栄ゆるが如し。而して悲しむべし、汝らは幻に居て幻を知らず。その幻滅の悲哀を感じるの時を知らざるなり。汝等、今の如くならば終局に於て悲哀を感じるならん。速やかに悲哀を感じぜよ。之を望む。悲哀を感じることは汝等にあり、然れども幻に居るは汝等の常なり。夢より夢に入る。悲哀を感じて悲哀に勝てよ。悲哀を通過して歓喜に入れよ。夢の道より出でて再び夢の道に加わらず、夢の道より永遠に別れよ。永遠の帰路を夢の道に得よ。悲しみ、真面目な悲しみを通過して、而して之に勝つて真の生命、真の歓喜に入れよ。—— 雑談に酔う人々を見て—— 我涙なり、祈りなり。

コリント前書10章13節、

「¹³汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし。神は真実なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能わぬほどの試煉に遭はせ給わず。汝らが試煉を耐へ忍ぶことを得んために之と共に通る^{のが}べき道を備え給わん。」

故に我等は硬き信仰を以て仕え奉り、如何なることも恐れることなく、主に任せてなすべきである。誠に有難き教えである。

この間の日曜、大手町では「生命に入るの門」というお話があったとのこと。マタイ伝7・13、ルカ伝13・22、24。このよきお話は『聖書の研究』の出づるを待つ。

讃美歌249を歌つて、義之君はルシタニア号沈没を偲び、僕はタイタニック沈没を偲ぶ。誠に悲壮、沈痛な而も聖なる深き愛をあらわす調べである。神の歌には本当によき歌である。尾田先生、欧米御巡察のお慶事、御手紙を以て敬愛する先生にお慶び申し上げた。

○1923年6月2日 (土)

晴。今日は第2回目の数学の試験があった。幸にして2題とも解けて嬉しかった。この前の0点の面目を新たにした。難物数学も一心にやれば出来ないことはない。自信をつけさせられて有難かった。

午後からボートを漕ぎに行った。3時にやっと艇を出した。隅田川とちがって、水流清く沿岸もよく、気持がよかった。湖面の如く穏やかな処もあった。愉快的漕艇をなして日



没に引きあげた。帰りに、「やまと湯」へ入って心地よく空腹で桐寮へ戻った。一時は曇った空も夜に入って、暗雲悉く払われて、清き淨き星が散っていた。一時曇った今日の僕の心も星に励まされ、慰められて、はれた。

コリント前書11章27節、

「²⁷されば^{よろ}宜しきに^{かな}適わずして主のパンを食し、主の酒杯を飲む者は、主の體と血とを犯すなり。²⁸人みずから省みて後、そのパンを食し、その酒杯を飲むべし。²⁹御體を^{わきま}弁えずして飲食する者は、その飲食によりて自ら審判を招くべければなり。」

今日の私の謹みて戴くべき教えである。

○1923年6月3日(日)

晴。昨夜、就床したのは午後9時であつた。そして今朝起きたのが9時、丁度12時間床の中に居た。安息日を聖守するものは、ここでは相変わらず自分一人。孤独を感じる。勉強をする、雑談をする。一つの感謝あるなし。一つの讚美あるなし。我は彼等と離れ行く。離れざらんと欲しても離れ行く。また可なりである。馬鹿にしたければ勝手に馬鹿にするがよい。我が机上にルーテルを置くは、ルーテルその人々を崇敬するのみにあらず。否、決して然らず。ルーテルを用いて、はたらきし力である。ルーテルをあの如くなさしめし御力である。誠に、

「独逸ツーリンギヤの森の中にマルチン・ルーテルに。^{へきすう}僻陬の地ユダヤに生まれ給いし大工の子なりし彼、現われ給いて、文明世界は震動せり」

である。「感想十年」中の、「我主イエス・キリスト」其一、喚求(Invocation)を読んで、恰も大手町で先生のお話をうかがう如く、またその残れる青線を見て、兄上と共に然り然りと云う如く、非常な歓びと力とを与えられて読んだ。その一節をとって僕も言う、

余は今日^{なんじ}爾を信ずるを得たり。嗚呼、如何なる幸福ぞ。余の周囲に群がる人々は未だ爾を知らず、誠に彼等は未だ爾の何たるかを知らずして希望なき人生を送る。真に爾を知って何人か爾を去り得ん乎。ああ、我が主イエス・キリストよ、余の生涯の終りまで爾の愛を以て余を爾に繋げよ。爾余より何物を取り去り給うとも、余の爾に於ける信仰を取り去り給う勿れ。余をして爾を以て余の栄光の極となさしめよ。

先生に声を合わせて。

昨夜も兄上の夢を見た。夢は誠に不思議なものである。夢は誠に有難きものである。想い切なる時、兄上、夢に現われて、我と語る。我と歓び遊ぶ。こんなこと、現在何処で為し得る。

誠に、主イエス・キリストの再臨と彼との再会とを信じ得ば、自分は何もいらぬ。そし



てこの信仰の心の燃え立つときほど幸福な時はないのである。兄上が嘗て僕に、同心町の二階で言われた片言を明らかに記憶している。

「辰さん、基督教でなければ……」

この語を発して当時の兄上の心中は如何なりしぞ。それを知らざりし僕、今に至って断腸の想いがある。然れども、主イエス様に感謝する。その忠実なる僕なりし兄の血よ、涙なり。ああ。幸にて自分は、今日、エス様を信ずる者となし給いし者となりたり。

1923年よ、二十歳の春よ、その基は永遠の基なり。主によりて、とこしえに。

「⁷愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、

神より生れ神を知るなり。」(ヨハネ14・7)

○1923年6月4日(月)

晴。蒸し暑い。だる気を催す心地よからぬ天候であつた。自分の深き罪なる慾よりして、2、3日前に胃を害した僕は、今日の様な日にも感謝してその苦しみを受けなければならなかつた。父なる神の下し給う罰は正当である。僕はこの深き罪に対して、父様が下し給う罰を受けなければならぬ。何日でも忍ばねばならない。舌は相変わず、白く、胃のはたき鈍っている。汝はこの罪を何度犯せしやと問われるときに、私はお答えする一言も持たない。ただ罪を赦し奉り、救い給はんことを祈り奉るのみである。荏弱じんじやくなものに苦杯を重ね給いて、信仰を強くせしめ給う御聖旨の貴さよ。僕は胃弱不快の今日、ますます神におすがりするのである。

○1923年6月5日(火)

神よ、私の上京の日は近づけり。願わくはその日まで御聖旨ならば私の胃を癒し給え。母の私を憂うることをおそるればなり。私、在京中も謹みて食を食らじ。しかしもし、然らずとならば、罪の苦しみになお遭わしめ給え。御怒のとけるまで感謝して御罰を受けなん。誠に誠に、よく癒えんとしては、これを己れの慾のために悪くせしこと今日まで幾度なるかを知らず。ああ、罪人、罪人。コリント前書11章29節を犯せし大罪人は我なり。願わくは赦し給え。

義之君より葉書をもらった。82番を知って嬉しかった。この前の日曜には「偽の預言者」(基督伝研究第29回)のお話があったとのこと。マタイ伝7・15〜20、ルカ伝6・43〜45。

「¹⁰それ神にしたがふ憂は、悔なきの救を得るの悔改を生じ、世の憂は死を生

ず。」(コリント後7・10)〔英文省略〕

——今日の有難き教——



○1923年6月6日(水)

晴。Starry Night.今日は初夏らしき空であった。夜は、近頃にならない見事な空であった。久しく別れていた懐かしき星と相見えて何とも云えぬ感じがした。やはり昔が思い出された。そしてまた、将来の希望を彼等は無言の裏に語るのであった。

汚れし人の世を憎みて 飛び去りし天の上より

今も尚 夜毎に 女神は輝く牧神と共に

という歌を有っているSpica〔スピカ〕が炯々として輝いていた。そして夏の夜を報すScorpio〔やそり座〕がその全身を南天に横たえていた。Antares〔アンタレス〕はSpicaと共に強き浄き光を放っていた。

コリント後書12・10、

「¹⁰この故に我はキリストの為に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭ふことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。」〔英文〕

「その日の仕事につぶされし者なし」とは善くも云った。やりきれぬという時はきっとその日の外に翌日のことまで背負った時である。故に諸君、諸君はそんなしよい方としてはなりませんよ。明日のことまでしよっていると気がついた時には、少なくとも

「これは自ら勝手にしよいこんだのだ。神の御意思ではない」

という事は思い出さねばいけません。神は諸君に云われた

「明日の事は只、我にまかせよ。今日のことにのみとめよ」

と。——G.Macdonald——

○1923年6月7日(木)

晴。今日は夏らしく暑かった。それでも夜には羽織が着れないことはない。昨夜の牛肉が当たったと見えて、お腹がゆるんだ。それほどまで心がとどかなかったのは残念であった。もう一步、お腹のことを思ったら牛肉を食べなかつたろう。健康を害している近頃の僕には原因がある。それは未だ慾が勝っていることである。この食に対する慾の罪の根絶するまでは、僕は何時まで立っても駄目である。罰を受けねばならない。身体は己れの身体にあらず、戴いた貴き身体である。

誠に病は僕の罪に対する感謝すべき恩恵である。うながして下さるお父様に、自分の誤れるを告白して、お赦しを乞い、この恩恵をして己れに効あらしめなければならぬ。神を信じて、御赦しを乞い奉り、而して後は聖旨にゆだね奉らん。何時癒し給うともそれは神の聖旨次第である。ただ自分は御聖旨に違わずに歩むことが必要である。

高島様のまま様から第4回目の御手紙を戴いた。まま様の御病気は慢性で本当にお気の毒である。一步も外出を赦されない。お身体の少しでも回復せられんことを切に祈り奉る。

明日は帰京する。母上は御待ちのことであろう。僕も速く帰って母上と握手したい。母



上の御眼をおえば、僕は何でも忍んでなさねばならぬ。何でも進んで母上のためにしてあげねばならない。

○1923年6月8日(金)

晴後雨。今日は2時の汽車で帰ろうと思って居たところ、幸なるか、グンデルト教授欠勤のため12時の汽車で帰るを得て、有難かった。車中は独り。暑くなった。心は勇んで居たために、車中は短く思われた。東京へ着いたのは4時。帰宅したのは4時半であった。橘様という方が来て居られた。母上は飲んで迎えて下さった。僕も飲んで挨拶した。夕方、雨中を散歩した。佐藤六郎様が母上に書を読みに来られた。お湯屋へ行った。痩せて居るのに自分ながら悲観せざるを得なかった。

ガラテヤ書5・16、

「¹⁶我いふ、御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。」

ここに歩まなければ、僕の身体は駄目である。身体は身体のことを、アレコレと考えざるに至って丈夫になるのである。

○1923年6月9日(土)

曇。起床7時。僕の敬愛する尾田先生の渡欧を見送らんため、東京駅へ行った。先生は、変わらず質素で居られた。先生もまた僕の身体のことを尋ねて下さった。僕は、丈夫であると申しあげるものの、やはり心中聊かの詐^{いつわ}りなきを憶えて、己れと己れを薄して苦しみを感じるのであった。僕は罪の塊の真黒なものである。東京駅で、矢作先生を初めて見た。風貌堂々、体躯偉大、実に立派なものである。日本人もあれだけの体格ならば外人に対して遜色ない。尾田先生と懇談されて居られた。我が兄上を東京駅頭に見送ったそのかみが偲ばれた。先生のために御健康を祈り奉るのであった。先生のために歓び送るのであった。

細雨が降っていた。雨中の東京は乾燥の東京、風の東京よりもよい。丸ノ内ビルディングへ入って見た。丸善出張所へ入って30分位、書を見た。ミルトンの詩集、ローウエルの詩集など実に欲しかったが、お金がなかった。尤もお金があったとしても、未だ読む本は家に多数残されてある。それが済んでからのことである。動力展覧会へ行った。水力電気に関する活動写真を見た。

母上と一緒にお昼を戴いた。午後から神田と九段へ本の用で行った。夕飯は美味しい白ソーズの御馳走であった。近頃は肉よりも魚よりも新鮮な野菜が好きになった。ことにこの頃の、サヤエンドー、キャベツ、ジャガイモ、ソラマメの如きは大好物である。母上に宗教書を読んで差し上げた。

10時頃、兄上が宇都宮から帰宅された。皆で苺の御馳走を食べた。美味しかった。外の野菜も出して食べた。出したものは誰だ、僕だ。そこに己れの欲が働いた。既に罪があった。



口に入った。美味しかった。しかし食べたあとの感じはどうであるか、お腹が満ちているよりも、足らぬ方が遥かに勝れりである。もう自分は、言うをやめよう、書くをやめよう。ただ従いて行わんのみ。大手町の聖時Holy Hoursを待ちつつ眠る。

○1923年6月10日(日)

晴後曇、夜雨。久しぶりで大手町へ行く。

基督伝研究第30回。

「言表や言行」。Say〔言〕とDo〔行〕とBe〔在〕。We must be "Be".である。

マタイ伝7・21～27、ルカ伝6・46～49。讃美歌45、235、456(婦人)、185。

畔上先生のお話は、ペテロ前書2章、3章の所々であった。

ギボンの基督教に対する所見、大なるもの4条は、実に基督教の永久に易らざる栄ゆるものなるを示すものである。基督教の優秀なる未来観、基督教徒の確く信仰の上に立ちて動かざること、神の愛によりて結ばるる団結心、基督教徒の行の常にその教に従いて清かりし事。ギボンの心を動かしたる基督教の力は実にこの4条であった。

讃美歌456は、何日か何日かと待っていた僕の聞きたい聞きたい歌であった。これを婦人の方が唱われるのを聴いて僕は、言われざる涙の中に、

「大きい兄さん！ 大きい兄さん！」

と心の中に呼ぶのであった。One of my most favourite Songs.

「きよき岸辺に やがてつきて、

天つみ国について昇らん。

その日数えて たまのみかどに、

友もつからぬ 我を待つらん。

やがて会わなん、

愛でにし者と

やがて会わなん。」

兄上これを愛唱して居られた。今も兄上のその声が耳に残っている。実に好い歌である。今日で丁度、山上の垂訓が終りを告げた。山上の垂訓の最後の御言は実に之である。

「²⁷雨ふり流みなぎり、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒^{たおれ}はなはだし」

(マタイ7・27)

感謝の2時間を戴いて帰った。義之君に会わんと待っていたが見つからなかった。

佐伯様へ兄上の遺稿のことで行く。帝大の中を一寸と散歩した。西片町の辺を歩くと、言うに言われぬ懐かしさを感じる。大きな椎の木はその昔を語る。

7月22日以降、8月第4日曜日(26日)まで軽井沢集会所で午前10時半から集まりがある、とのこと。



西洋菓子と母を母上様に買って載いて、先ず兄上の霊前に捧げて、皆で戴いた。美味しかった、非常に。一家のものが寛いで、ゆつくりと御馳走を戴くのは実に愉快である。夕方、兄上と一緒に風呂に入りに行った。楽しい晚餐を戴いた。気持ちのよい雨が降っていた。楽しい夜は更けて行った。幸福すぎる程の善き日を戴いた。

○1923年6月11日(月)

曇。午前9時頃、家を出て、中野なる山本の姉上のお家へ行った。姉上のお家ではこんど新しく家を建てられるとのこと。好き家の出来ることを祈る。神様の暖かき愛は相変わらずであった。お昼御飯を姉様と小さい三人の人々と共に戴く。It's Humble, but Sweet in 三であった。午後1時半からこれ3時まで義雄さん、隆さんを伴って風呂へ入りに行った。小さい人々の喜ぶのを見るのは何より嬉しい。富美ちゃんにお土産を買って来て上げた。夜、兄上の遺稿のことで岩瀬さんのお家へ行って、父なる方にお会いした。「天の使」という題のゴータの訳が紛失中で困っている。岩瀬一民様の名簿中に、次の如くあった。これによって父なる方もその親交のただならざるを知られ、二人のため惜しまれるのであった。

「小池政美、to Jesus Christ Hall, Heaven!」

と。今は共に御許に語りて楽しき時を、永久に過ぎし居給うのであろう。僕も、やがては兄上に会われると思えば、嬉しくてたまらぬ。確く北京の跡を踏み行かん。

神田神保町、牛込神楽坂の辺は夜は相変わらず雑踏である。甘栗の出来たところを母上様に買って行って差し上げた。母様も姉様も喜んで召し上がって、僕は嬉しかった。

○1923年6月12日(火)

曇、晴、定まらず。午前9時出掛けた、中渋谷の高島のまま様のお家へ。まま様が直ちに出て僕を迎えられた。まま様の外に何人も居られなかった様である。信仰と兄の遺稿などのことで色々とお話をした。楽しい2時間半は送られた。愛を以て、親切を以て、快活を以て導かれた。お昼をまま様と一緒に戴いた。今日は私の心よりするMy first Visitである。本当に感謝の祈禱を捧げた。そのお昼はまま様の愛の結晶であった。まま様は女中を置かないのである。御自分で総てなされる。実際、美味しかった。1時半、お暇した。

山の手で武田へ行った。来客中であつた。塀は出来上がっていた。門は未だ。それに庭の手入れで、大混雑の呈であつた。叔母様は相変わらず、よろこんで下さった。宣ちゃんと二人で目白へ行った。水高対学習院の野球の試合応援に。第1回に1対0。時に3時40分、僕は矢作義之君の処へ行く時間になったので、残念ながら帰った。必勝の安心を得て。ところが、11対6で敗けたと後で聞いて少なからず驚いた。

千駄ヶ谷へ行ったら、彼はまだ帰宅していなかった。あとで、学芸会の準備のため晚く



なつたと知った。帰宅したのは5時少し前であつた。母様とお話をした。夕飯は相変わらず御馳走で美味しく戴いた。風呂も沸いていた。心を尽くして母様と姉上が款待して下さる。この身こんなにされては罰^{ばち}があたりそうである。総て感謝であつた。母様と姉様と三人で青木へ行つた。叔父、叔母、実さんの外は居らなかつた。11時頃帰つて来た。帰途僕は理髪屋へ行つた。東京のは感じがよい。

……〔英文省略〕……

○1923年6月13日(水)

曇。午前、母様に『聖書の研究』6月号を読んで差し上げた。10時半頃出掛けた。染井へ。白あやめ、白菊、黄菊、赤撫子、白撫子を兄上の墓前に供えた。先祖代々、父上、寒梅院のお墓には黄菊、白菊を。お墓に注ぐ水は、僕の心の全体であつた。心そのものであつた。涙そのものであつた。愛そのものであつた。水は墓碑を潤した。小池政美という字の中に沁みこんだ。あたかも、僕に答えて下さる様に。熱祷を捧げ奉つて、涙は禁じ得なかつた。寂寞たる墓地に兄上と祈りしその時は、何たる幸福なときであつたらうか。感謝は尽きなかつた。涙も尽きなかつた。石の間より萌え出でたる笹一本を抜いて今日の記念に戴いた〔笹葉の押葉貼付あり〕。My Brother's Blood into Grass。

兄上の名の上に記せる「従七位」なる三字は正に無要の字である。僕が見て、この三字のかわりにCross「十字架」の標のあるのは明らかである。

嘗て、母上、兄上、三人でこのお墓の鉄柵を塗りに来たことがあつた。当時の兄上の姿、歴然たるものがある。兄上が大学、次兄が中央幼年校、僕が中学のとき、よくお墓詣りに来たことがあつたが、その時の事など思い起^こされて、感慨無量なものがあつた。共に、花、線香、桶を携えて来たりしそのかみよ。今は、その人をこの墓地におき去りて独り涙し帰る。その淋しさよ、悲しさよ。兄上よ、僕と相携えて我が家に、母のもとに帰らざるか！独り桶を提げて帰るは、いたまし。然れども！かなしむ勿れ！立てよ！立てよ！雄々しく立てよ！兄上、我を救い給えり、主によりて！兄上、我と共に在ります！

帰途、佐伯様のお家へ行つた。午後1時帰宅。母様、待つて居て下さつた。お昼を戴いた。5時の汽車で帰ろうと思つたが、名残惜しさに、母様と少しでも長くお話しせんと、8時の汽車で帰ることにした。楽しき晚餐を三人で戴いた。好きなキャベツと瓜揉みと空豆は毎食どれかを戴いた。この度の上京は、本当に幸福な時を多く戴いた。身体の具合は御導きにより、聖霊を戴いて肉に勝ち得て、癒えた。

聖霊、常に我と共に在まして我を肉より離れしめ給え。

母様を幾分なりともお慰めし得たこと、本当にお導きでなくて何であつたらう。我が心にあらず、父の御心によりて。そして、姉様からは、母様よりも、御二人から、僕の身体



のために美味しい御馳走を戴いた。それは皆、暖かき血と肉と化した様である。勇み立つて

「行つてまいります」

と云つた。喜んで別れた。この夏には一層の元気を以て、母様の許に帰ろう。

車中は、眠つたり、窓外を眺めたり、語るべき友が居なかつた。わが敵は相変わらず居た。我が眼は光つた。我は怒らんとした。しかし神はやわらげ給うた。聞くに忍びざる談笑をしている。高等学校生は彼等か。大学生の卵は彼等か。何々学士の卵が彼等か、と思つたときに、なさけなくなつた。世はやはり敵である。世はやはり荒波である。世はやはり荒野である。抛るべきはただエホバのみ。

水戸駅着。最初に改札口を出て来たのは僕。総てのものを後にして、スタスタと急ぎ帰つた。活動写真の帰りの愚民、惰民、逸民が、ぞろぞろと歩いている。僕の眼にはウジ虫としか映じなかつた。彼等の悉くをぬき去つてやはり独り歩いた。停車場から桐寮まで25分、今までのレコード。星が現われて居た。嬉しかった。就床12時。感謝の心に眠る。

○1923年6月14日(木)

晴。

Thou hast made us for Thyself, O Loed; and our heart is restless until it rests in Thee. —

St. Augustine —

「貴神あなたは我等をあなたのために創造られました、おお主よ。我等の魂は貴神の中に休つまでは平安やすきをえません。——アウグスチヌス——」

「今日のみを ささやかなるも 信仰のま垣に囲み 小庭には愛のみ時きて、その中に
我は住みなん。心してま垣はこえじ、明日の事 何ぞ望まん。神のみぞ 何が来とも、
わがために備え給わん。喜びは我を忘れず、悲もさげざる心を。」——メーリー・フラインセス・バツツ——

今日は、随分暑かつた。水着を着たい位であつた。義之君から葉書をもらつた。彼は日曜に僕が大手町へ行つたことを知らなかつた。星の夜。彼のところへ手紙を書く。

○1923年6月15日(金)

曇。梅雨期にある今日なども、なんとなく蒸し暑い。

God is my refuge and strength, a very present help in trouble.

「神はわれらの避所また力なりなやめるとき最ちかき助なり」(詩46・1)

この頃は眠い。夜眠い。朝やや眠い。授業中さらに眠い。学校から帰つて来て眠い。眠い眠いである。しかし、眠られない眠られないに比してどんなに幸であるか。しかし眠い眠いと云つて何もしないわけではない。またぐずぐずしているわけでもない。眠いときは



仮眠を1時間位やって、徹底した勉強をすることにする。兄上に倣って、テキパキと、敏捷に。我を駆ってかくせしむる偉大なる力がある。有難いことである。

○1923年6月16日(土)

雨。梅雨が降った。終日。蒸さなかったので、家の中へ居るのには静かでよかった。母上様に葉書を差し上げる。そろそろ忙しくなってきた。午後からはよく勉強した。自分のスピードののろいのに少々悲観した。もつと鋭くなるを要する、速くなるを要する。独逸語と英語をうんと勉強しよう。兄上の語学の力位になりたい。兄上は実際、精力の人であった。絶倫であつた。ぐずぐず、のらくらは大嫌いであつた。僕も澁刺たる精力の人になりたい。自分の精神一つである。自分は自分の仕事の大塊に第一のシャベルをさし込んだ位のものである。これ運び尽くすは、遠き将来のことである。しかし運び尽くすのが目的でない。一シャベル、一シャベルが目的である。故にその一シャベルを最も有効に真剣になすを要す。神の嘉し給うはこのことである。午後正12時に書き終った。そして寝た。

○1923年6月17日(日)

今日も終日雨。午前は聖書と宗教書に。大手町も今日で一段落である。午後から丹後様の家へ初訪問に行く。あまり面白くなかった。信仰のある人かと思つたら、そうでない様で少なからず悲観した。みやこ湯で菖蒲湯に入る。今日は雨中の小散歩をした。

「主の日」の歓びは相変わらずで、本当に感謝である。この御恵、永久に我と共に在らんことを切に祈り奉る。僕はどこまでも自由な信仰のもとに確く立つて従わん。世は如何になり行くと、友は如何にあらうとも。基督者が如何に主義を変じて冷たくなろうとも。

我は、クロムエルの如く、ルーテルの如く、バンヤンの如く、トーマス・ア・ケンピスの如く、兄上の如く。この感謝と歡喜。僕の周囲の人々さえ知らず。義之君の眞の信仰の友たることを祈り奉る。

母様、まま様に音信するのが楽しみである。宇都宮の兄上のこれに向かわれつつあることと本当に感謝である。

「¹⁴それ律法の全體は『おのれの如くなんぢの隣を愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。」(ガラテヤ5・14)

「²¹また『視よ、此處に在り』『彼處に在り』と人々言はざるべし。視よ、神の國は汝らの中に在るなり」(ルカ17・21)

「²⁴キリスト・イエスに屬する者は、肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。²⁵もし我ら御靈に由りて生きなば、御靈に由りて歩むべし。」(ガラテヤ5・24～25)

「⁸己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御靈のために播く者



は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。」(ガラテヤ6・8)

「⁴体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望をもて召されたるが如し。⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」(エペソ4・4～5)

「⁸汝ら旧は闇なりしが、今は主に在りて光となれり、光の子供のごとく歩め。

……¹⁰主の喜び給うところの如何なるかを弁え知れ。」(エペソ5・8～10)

「¹³我を強くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4・13)

〔以上の聖句英文省略〕

食に対する自分の妙な欲は、御導きにより消え失せた様である。段々身体が回復して来た。自分の速やかにこの御心に従わざりしを悔ゆるのである。

今日戴いたこの御聖旨、永久に我と共にあらんことを。身体が出来て、主の御用は更によくなし得るのである。今日、体重を測つたら五百匁〔約2kg〕近く増して居た。

My Favourite Hymns : 181、81、439、82、56、234、456、441、171、261、233、249、180、446、321、357、427、213、368、235、144、185、202、53、280、409、309、170、310、445、246、232、223。〔註：これらの古い讃美歌番号は、1955年改定の日本基督教団讃美歌番号とは一致しない〕

「春のあさけ 夏のまひる、

秋のゆうべ 冬の夜も、

いそしみ播く 道のたねの

たりほとなる 時いたらん。

かりいるる 日はちかし、

よろこびまで そのたりほ」

「会つ毎に見る毎にひらめく親切、丁寧、温和な考はよし微かなるも、大なる「あたま」、大なる「つで」より 泉 余程大きな温味をその人につける」—— M.A.Kely ——

○1923年6月18日(月)

晴。感謝なる御恵に浴して今日も亦。主の愛と温順と親切と我に來りて、我が周囲の人々に注がれんことを。主を知らで歩む人々をあわれみ給え。彼等の主によりすがる日は何日なるぞ。スピノザとよ、或いはその智をほこる。音楽とよ、或いはそれを玩ぶ^{もてあそ}。小説とよ、或いはそれに霊を朽らす。スピノザもよし、音楽もよし、小説もよし、唯々彼等の霊の醒めんことを。霊醒めなば彼等の従来の「虚」をいたく悔ゆるならん。

小学校の小兒が父の帰りを待つて「オカエリナサイ」と元氣よく喜々として迎える。父は小兒の愛に勤務の労れを忘れたるが如し。かたくるしき、支那の礼の教、かたにはまりした生活、礼儀を排して、愛に生きよ。その喜びは、幸福は、之を礼儀に見ることを得ず。

「²⁷汝等ただキリストの福音に相應しく日を過せ、……」(ピリピ1・27)

「¹⁴なんぢら眩かず疑はずして、凡ての事をおこなへ。」(ピリピ2・14)



「¹³我を強くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4・13)
「¹¹われ窮乏によりて之を言ふにあらず、我は如何なる状に居るとも、足ることを學びたればなり。」(ピリピ4・11)

——今日の御教——

『基督の如く』、こんな救の泉とも云うべき靈の糧の書、実に少なしである。最愛の書の一つは確かにこれである。最愛の友の一人である。

「強いて所を選ばずに君のある所にて、常に人より君のいる事を望まるとなり給え。人の欲する所、思ふ所をよく尋ねて、その人その所に適う様に助け給え。その中の凡ての快樂も、親切な心の感ずる一つの悦には及ばない。」——G.Herbert——

○1923年6月19日(火)

雀を捕えた生徒が居た。巣立ちの鳥であるらしく、あまりよく飛べない。そのものは、ある者にその雀を与えた。雀はもがいていた。僕は問うた「その雀をどうするのか」と。彼は言った「焼いて食うんだ」と。僕は身ぶるいする様だった。次の瞬間に僕は既に、彼、弱き哀れなる雀の心になった。味方になった。彼と一体となった。心は燃え立った。彼の命を救わんために極力、彼に申し立てた。彼は飽くまで「焼いて食うんだ」と言った。「焼け火箸で刺す」とさえ言った。その中に時間が来て授業が始まった。僕はその雀をもらう方法を考えた。そして買ってやろうと決心した。彼はかよき雀をポケットの中に突っ込んだ。その中に彼は雀のことを忘れて油断をしたらしい。これぞ、神の雀に与え給うた機会であった。雀は俄然、パタパタと飛び立った。そして辛くも開いた窓から飛び去った。多くの生徒は騒ぎかけた。窓をしめんとさえしたものがあつた。ポケットに入れていた当の者は悔しがっていた。先生も一寸驚いたような顔をして居られた。僕のみは「これなり！これなり！」と神に感謝し奉った。僕の願いは驚くべし、授業中に既になつてしまった。雀が一声、チーと放つて自由の空に飛び去ったときの彼の歓びと感謝は正に僕のそれであつた。雀と僕、それは何より淨き友達であつた。彼、悪魔がこの雀から教られるところがあつたら、更に大なる感謝である。彼は恐らく、くやしがつたばかりであろう。後で彼に二、三の穏やかな言葉を放つてやったが、彼はそれを何ととつてくれたらうか。

My Brother's living words.

「最弱いとしき者、いと貧しき者と雖も、若しする気さえあれば、毎日毎日、自分の回りに天国の如きものを作り得ることを忘れてはならぬ。親切な辞ことば、同情ある注意、辞をかける人、注意を払う人には何でもない事であつて、受ける人には大なる恵である。考えて見れば是こそ我等の本当の幸福ではあるまいか。一時一瞬かくの如き小なる親切によつて我等は暮らしていいけるのではないかしら。」——F.W.Robertson——

コロサイ書第2章、第3章、有難く戴く。感謝なる夜の9時より10時。



いくら試験でも、聖書と宗教書に午後の9時から10時までの聖なる時間は戴かせて戴く。この喜び、慰め、感謝。聖安息日には、試験中にも「主の日」なる故に、僕は勉強する心にはなれぬ。この御恵、願わくは、いつまでも変わらざらんことを。

「¹⁸汝らの爲し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。¹⁹愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。録して『主いひ給ふ、復讐するは我にあり、我これに報いん』とあり。²⁰『もし汝の仇飢ゑなば之に食はせ、渴かば之に飲ませよ、なんぢ斯するは熱き火を彼の頭に積むなり』²¹惡に勝たるることなく、善をもて惡に勝て。」(ロマ12・18～21)

日々の生活に次第次第に御言が解つて来る喜びの有難さ。我が快樂、之に勝るものなしである。

母上様を思う。その御不自由を思う。ただ涙のみ先だつ。耐えかねて所信を差し上げる。母様の許に居れぬ我は、(水高になんか入つて) ある点からして親不孝である。大学は、石にかじりついても必ず東京帝大へ入らねばならぬ。母様、母様、あと約3年を待たれよ。しかし、楽しみまたこの中に在りですから、かくて3年を過ぎす間にも感謝は沢山ありましよう。やはり、私達は神によりて安しです。

○1923年6月20日(水)

晴。ああ、昨日の夢よ。ああ兄上よ。その夢の中で如何に我がために飲んで下さったことよ。そして兄上は、如何に澆刺たる喜々たる御姿にてありしことよ。母上、兄上、次兄そして僕が皆集まつて如何に愉快な時を過ごしたことよ。夢の中で――

「大きい兄さんは死んだのではないか。それなのに、あんなに元気で居られる。何と喜ばしいことではないか。兄さんは生きている、生きていると雀躍して喜んだ」

――それがやはり Dream で桐寮の一室に寝ている自分を発見したときの感は、如何なりしぞ。僕は、暫し、床の上に沈むが如く、我を忘れて、涙なりき。

しかし、しかし、夢ではない、夢ではない。再会の希望がある、喜びがある。やはり、大きい兄さんに会えるときはある。今に来る。再臨よ、再臨よ。再会よ、再会よ。どこまでも信仰はこれに。……………

十字架を仰ぎ瞻^みて、御赦しを得て、祈祷と感謝に。

テサロニケ前書4章14節～18節。再臨と信者の復活と再会。

「¹⁴我らの信ずる如く、イエスもし死にて甦へり給ひしならば、神はイエスによりて眠に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給ふべきなり。¹⁵われら主の言をもて汝らに言はん、我等のうち主の來りたまふ時に至るまで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。¹⁶それ主は、號令と御使の長の聲と神のラッパと共に、みづから天より降り給はん。その時キリストにあ

る死人まづ甦へり、¹⁷後に生きて存れる我らは、彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎へ、斯くていつまでも主と偕に居るべし。¹⁸されば此等の言をもて互に相慰めよ。」(テサロニケ前4・14～18)

「¹⁶常に喜べ、¹⁷絶えず祈れ、¹⁸凡てのことに感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給ふ所なり。」(テサロニケ前5・16～18)

○1923年6月21日(木)

雨。梅雨の天候。蒸して、頭はおされる様で変な気分であつたが、お午頃から曇り出して微風も加わつて来たので、ずっと楽になり、やがて雨が降つて来て一層気持よくなつた。夏の夕方とも思われる様な雨の降つたのは実に珍しかった。そして、とうとう夜おそくまで、筆を走らす今なお降り続いている。落ちついたよい夜である。

人よ、悪口言うをやめよ。批評を軽がろしく出だすなよ。また君達の言は、あまりに表裏あるには非ずや。その人の前にては丁寧で、陰にては全然之に反する、聞き苦しき語を以てその人について語るに非ずや。君らはそれで人ですか、男ですか。単にして純たれよ。あつさりせよ。人の嘉き点を見て、欠点を見のがして、その人に対せよ。

妙に技巧の入つた言語は本当に聞き苦しい。僕はあつかりと、ぶしつけに言つてもらいたい。都人の妙な陰險な瞥見は是非やめてもらいたい。そこに冷やかな空氣をただよわせるから。とにかく、こしらえごとをやめてもらいたい。自然、心の自然、愛のこもれる、これに勝る暖かみはない。子供らしい純にて交際しようではないか。妙に大人めいた口調をあやつつたり、風をしたりするのは、青年のやりたがること。よすがよい、よすがよい。

「単純に、活発に、而も言われざる愛を以て」

これが何よりの幸福を齎らす交わりではないか。僕の好きな友はこれである。ルーテルの代わりに、ホイットマンの写真を額に入れた。「自然の兒」、彼の^{おもかげ}俤は髭髯たりである。懐かしきかなホイットマン。

「¹³汝もしエホバがイスラエルにつきてモーセに命じたまひし^{のり}法度と^{さだめ}例規を^{いそ}謹みて行はば、汝旺盛になるべし。心を強くしかつ勇め、^{なか}懼るる勿れ、^{おの}慄くなかれ」(歴代志略上22・13)

我が霊、この言葉に今日、何と励まされたことよ。感謝なりき。

○1923年6月22日(金)

風雨。兄の日、謹みて送る。With Rejoice and Hope, Sing for you, My Brother!

「¹みたみらのために　そなへたまひ」

かがやくみくにへ　ゆくよしもがな

かがやくみくにの　たのしきいへに



まてるわが友と

あふよしもかな

父なる御神の

まねきたれば

みもとへゆく身を

ひきなどめそ」

大正5年(1916年)。同心町の家で滋雄さんに(写真機の珍しかった頃)撮って戴いた懐かしき思い出の小さな写真。僕(中央)の小学6年生のとき。兄上の一高在学当時。次兄、宇都宮の兄の中央幼年校当時のことである。懐かしき、懐かしき同心町の家に、恩愛、最敬の母上様の一人の手に育てられて、睦まじき三人は、姉上(山本の)も共に、如何に平和なる幸福なる時を過ごししことよ。その記念なる一様の貴き写真は今我が手にありてこれを見る。思い出は涙と共に尽きず。而して、誠に歓喜と希望は更に更に尽きず。 Prayer, Tear and Thank, Joy and Hope.

テモテ書前書。変わらず有難き御教に、生命の泉を注いで戴くその御恵の有難きことよ。聖書と宗教書はついに一日もこれを繙かずには寝ること能わざること、本当に神の御恵に非^{あら}で何であるか。

「11神の人よ、なんぢは此等のことを避けて、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和とを追ひ求め、¹²信仰の善き戦闘をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。汝これが爲に召を蒙り、また多くの證人の前にて善き言明をなせり。」(テモテ前 6・11～12)〔英文〕

梅雨期に少々、弱っている僕の胃のために感謝なる教を戴いた。テモテ前書5章23節

「²³今よりのち水のみを飲まず、胃のため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用ひよ。」

明日、早速、買って戴きましよう。母様も、僕がこんど水戸へ来るときに僕に言っておきつたのでもあったから。

パウロ、誠に教う。

「11神の人よ、なんぢは此等のことを避けて、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和とを追ひ求め、¹²信仰の善き戦闘をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。」(テモテ前 6・11～12)

今日は随分、ひどい吹き降りであった。一旦、藏ったマントさえ出して着て登校した。道は大洪水である。足は奇麗にあらわれた(下駄で行く)。友の傘が一本、風に煽られて壊れたのは気の毒であった。夜10時頃やっと、風雨共にやんだ。

○1923年6月23日(土)

連日の降り、湿りの気持の悪い天気。今日は一掃されて、心地よき夏霽を見せた。夕飯後、ことに気持よくて、球抛をした。今日勉強をするはずであったのが、天気あまりによいのと、附属の連中の遊びに来たのとで、殆どなす処がなかった。



テモテ後書第3章12節、

「¹²凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。」〔英文〕

○1923年6月24日(日)

晴。昨夜から「星人参規那葡萄酒」を戴く。かつて、武田の叔母様にお勧めされ、そして有難く戴きしもの。昨日、水戸の町で購って来て、二本目を戴くことにした。主の御教により、有難く。きつと精力と健康を与えて下さるであらう。

The Sabbath. 「安息日」

「¹斯天地および其衆群悉く成ぬ² 第七日に神其造りたる工を竣^{おえ}たまへり即ち其造りたる工を竣^{わざ}て七日に安息^{やすみ}たまへり³ 神七日を祝して之を神聖めたまへり其は神其創造爲たまへる工を盡く竣て是日に安息めたまひたればなり」(創世記2・1～3)〔英文〕

「⁹六日の間^{はたら}勞きて汝の一切の業を爲すべし。¹⁰七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲すべからず……」(出エジプト20・9～10)〔英文〕

「⁵また言ひたまふ『人の子は安息日の主たるなり』」(ルカ6・5)〔英文〕

「おお、我が神よ、我は爾^{なんじ}をのみぞ仰ぎ瞻^みる。爾こそ我が道しるべにて居ませ。我が心、正しく、我が望み切に、我が勇強く、而して信賴、神にあらば、我漕ぎ抜き得ん。如何なる暴風雨にも、よし暴風雨に激打さるるとも。懼るる勿れ、再び立たん。更に進まん、雄々しく強く。」—— Daily Strength for Daily Needs. よう——

今日の私の声に。

ヘブル書6章11～12節、

「¹¹我らは汝等がおのおの終まで前と同じ励をあらわして全き望を保ち、¹²怠ることなく、信仰と耐忍とをもて約束を嗣^つぐ人々に效^{なら}わんことを求む。」

詩篇第42篇、

「¹ああ神よしかの溪水^{たにがわ}をしたひ喘^{あえ}ぐがごとくわが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり。²わがたましひは渴けるごとくに神をしたふ活神をぞしたふ何れるときにか我ゆきて神のみまへにいでん。……¹¹ああわがたましひよ汝なんぞうなたるや何ぞわがうちに思ひみだるやなんぢ神をまちのぞめわれ尚わがかほの助なるわが神をほめたたふべければなり。」

午後、一寸、球なげをした。かつて母様から買って戴いたグローブ、本当によい。使い易いグローブである。

讃美歌274は、はからずも僕の知っている譜であつたので嬉しかった。主の兵275と類似の勇ましき歌である。



夜に至って雨が少し降った。今日は食欲がなくて困った。この罪の身体と罪の心、明朝は御光に照らされて浄められんことを。主よ、主よ、赦し給え、救い出し給え。アーメン。

○1923年6月25日(月)

雨。今日は地久節〔皇后の誕生日〕であり、叔母様の御誕生日でもある。お祝いの御手紙を差し上げた。梅雨が終日降っていた。お腹の具合が回復して嬉しかった。いやな試験勉強を始めなければならなかった。己むを得ずすることほど、無益なものはない。語学の勉強のほかは試験がすめば大体忘れてしまいうに違いない。しかし、課目が目的でない。勉強それ自身が目的である以上、普段から意義ある勉強をしなければならない。

もう一週間経てば7月と思うと嬉しい。梅雨も明ければよい。

「来れよ試験！ 我爾なんじに勝たん。来れよ夏休み。我爾に育まれて強健な身体とならん」

である。総て希望を抱いて、一日一日を迎えん。

へブル書10章32節～39節。何たる力強き御教なるぞ。誠に我これを遵り奉らん。

Walk strong! Firmsteps!

○1923年6月26日(火)

晴、月夜。今日は実に気持よき天気であった。午前2時間の休みがあったので、それを利用して自転車きこを約1時間程駆った。愉快だった。自分でクリームを作って食べたのは。殊に美味しかった。午後から放課後運動して風呂に入って、帰って来るときの心地よさ。言わんかたなしであった。夕食前、またキャッチボールを少しやった。夕食はとりわけ美味しく戴いた。

食後、「極東オリンピック」の活動写真を見に行った。帰寮したのは9時半頃であった。活動写真内の気儘きまま気というものは相変わらず不快なものであった。月明の外を歩き、懐かしき空に見凝いっている心地の、はるかに己れに近きを知ったときに、写真をいやな空気のなかで見ていた自分がおそろしくなった。カシオペア、白鳥、琴などの夏の星、それはかの片瀬の夏と兄上を思わせる懐かしき友であった。月の下に横たわっていたのは例のさそり〔サソリ座〕であった。

去年の今夜、僕は腸カタルに罹って、酷い下痢をやったのだ。思えばぞつとする。去年のこの頃を思い出すと、戦慄に価するものが多々ある。去年の僕は既に今年の僕と全然異なるものとなった。一大苦痛は僕に与え給うた大なる神の恩恵であった。「爾に至るの経路であった」。感謝なるはこの一事である。兄上の切なるお祈にお答えるの曙光を見た今日の私は本当に幸福である。感謝である。この御試験は当然受くべきものであった。神が救い出し給うことは確実、明白な事実である。信じ感謝して而して生きることが出来る。我



が一家に犠牲者が出た。そして我と残れるものは救われて行く。何と大なる御恵であろう。これに勝る感謝のことはあるか。我々感謝し、信じ、祈るばかりである。

ヘブル書第11章、1、6、13、14節。第12章1、2、5、6、14節。第13章6、7、8、9、10、20、21。

「⁶然れば我ら心を強くして斯く言わん『主わが助主なり、我おそれじ。人われに何をなさん』と。⁷神の言を汝らに語りて汝らを導きし者どもを思え、その行状の終を見てその信仰に效え。⁸イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給うことなし。」(ヘブル13・6～8)〔英文省略〕

貴き兄の血を偲びつつ。

○1923年6月27日(水)

午前晴、午後雨烈し。聖書の有難き御言を聴くより外に何もない。ヤコブ書の今日の僕に如何に強く響きしことよ。

ヤコブ書第1章2、3、6、12、14、27節。第2章26節。第4章5、6、7、8、9、10、14、15、17節。第5章8、10、11、13、15、16節。

「人生は快樂なりと言つ者は未だ人生を知らざる者である。生涯を真面目に送らんと欲する者にして其大なる悲痛を感じざる者はいない。」——復活と来世——

○1923年6月27日(木)

晴、満月。母様から御手紙を戴いた。最も喜ばしき信書として之に勝るものはない。愛する母上よ、その愛は之を何にたとえん。母上僕を愛し、僕母上を敬す。讚美歌を合唱する人は居る。しかし、彼等は音楽のため、故に僕の求むる對手でない。心から、自分の声として讚美歌を合唱する人がいない。独り歌わん。喬様から御手紙を三人の所へ戴く。その心は竟に僕に合わなかつた。彼の御手紙に真面目はあつた。しかし、我が望む光はなかつた。何時か、喬様に僕の心を語るときが来ればよい。その時の至るをただ神にお任せして自分は待つ。僕には所謂聖人、賢人、哲人、英雄豪傑のあとに従うことは出来ぬ。彼等の言、彼等の行、彼等の智、彼等の書によつては、ついに僕の霊を救うことは出来ない。

問題は霊である。最も真剣なものである。最大のものである。最難のものである。霊の救である。罪の贖いである。永遠の生命の受与である。光明である。真の歓喜である。現世的、処世的のものではない。如何にして世に処せば満足なるか、賢なるか、誉れなるか、人の典型たり得るか、立派なるか、ではない。如何なれば我々は「ある」かである。キリストに従い、聖書に従い、直接に神に従いてのみ我々は歩み得、be「あり」得るのである。彼、「ピュウリタン」を云々す。やめよその言、と云いたくなる。

自己にその本を置いて、潔白ならんとして遂に傲慢ならざるを得ない。律法に束縛され



て奴隷の身となり、常に死におらざるを得ない。外面と、かりの心は如何にもあれ。その身体の生命に於ては確かに死である。

ペテロ書第1章5～9、19、23～25節。第2章11、12、19、20、21～25節。第3章13～17節。第5章10節。今日の有難き御教。

満月が実に素敵であつた。気候も今日は、秋の様で言われぬ爽快を憶えた

○1923年6月29日(金)

晴。ペテロ後書第3章8、9、10、12、13、14節。

十六夜の月、遅く出で、天空は霞んでいた。犬の遠声が物淋しく響く。その庭前の祈り、試験勉強中の自分は、今日も相変わらずお恵に与り得たる日であつた。6月29日といえ去年、常磐病院に入院した日である。当時の思い出、いろいろ。

○1923年6月30日(土)

晴。午後3時頃、この春、大腸カタルを病んで、この頃全癒して学校へ来た友が来た。彼を見送らんとて、水戸駅へ行つた。去年、僕がわずらつたから、病気を如何に受けたかしら。彼のためにこの一事を憂う。彼の全快を喜ぶが、この一念はその喜びより更に深い。帰途、お湯屋で目方を測らんとて、みやこ湯に寄つた。体重器に上つた。針が動いた。12貫〔45kg〕とほんの少しである。しかし、この前測つたときより増してはいるのだ。これで母様にお報せすることが出来る、と大いに喜んだ。

帰つて来て、葉書^{したた}を認めた。母様をお喜ばせることは何より愉快なことである。いつだつたかのお手紙に、12貫になつたとその報せの来るのを待っているとおつた。それにお答えることが出来た。今日出来た。之は容易なことでない。僕の目方の最も多かったときに12貫4百匁位〔46.5kg〕だつたと思う。この夏に1貫目〔3.75kg〕増せばそれこそ大したものである。しかし、2寸6分〔註：5尺2寸6分は約159.4cm〕の身長に対して普通ならば13貫〔48.75kg〕は少なくとも無ければならないのだから。今秋中には13貫を突破したいものである。運動しよう。そして練えよう。

今日は、かなり蒸し暑かつた。夜に至り雨が降つた。

